高等教育研究センター
# かわらばん
冬号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第49号

## 学習における主体性の回復を
### ―正課外活動の機会をいかに増やすか―

大学では、公式・非公式、正課・正課外を問わず、多様な教育的・文化的活動が行われています。これらの活動から得られる知的刺激は大学以外の場所では得がたいものですが、学生たちはこれらの活動にどのくらい参加しているのでしょうか。ここでは、学生の学習状況を概観しつつ、正課外活動が学生の学びに与える影響・意義について考えてみたいと思います。

**学習者中心への教育の転換**

大学教育のあり方をめぐり、教員中心から学習者（学生）中心への転換の必要性が、近年主張されています。アクティブ・ラーニングの必要性が中教審答申でも指摘され、現在、多くの大学でそのあり方が追求されています。アクティブ・ラーニングとは、学生が能動的、主体的に学ぶ学習、あるいはそれを促進する学習形態といえます。大学教育の主人公は学生＝学習者であることを考慮すれば、学習者中心ということはきわめて当然のことです。それが改めて主張されるのは、実際の大学教育ではそれが実現されていないためと考えるのが自然です。

**学習の能動性・主体性**

大学の授業で学習者中心主義が実現しない理由は多様です。一つは、授業を行う教員の側に授業能力が不十分な場合があることです。授業能力は単に専攻領域に関する専門的知識だけではなく、学生の発達状況、基礎学力、既習事項、学習意欲等に関する知識も含まれます。着任後間もない教員の場合、これらが不十分になりがちです。

問題は学生の側にもあります。学生自身が、学習に対して消極的であり、主体的に学習する意欲に欠ける場合が少なくありません。学生の学習行動が受動的になっていることは、これまでにも各種の調査で指摘されてきました。たとえば、東大教育学研究科やベネッセ等の調査で、学生に参加を求める授業が当の学生自身から必ずしも歓迎されていないことが指摘されており、本誌第45号でもこの点を指摘してきました。彼らは学習の主人公になることを自ら放棄しているかにみえます。実は学習に対するこのような消極姿勢は、「学びからの逃走」として初等中等教育ではかねてから問題にされてきました。

学びの主人公になるということは、学習の目的・目標、学習のペースや場所、利用可能なリソースの選択・利用、評価方法等を学習者自身が選択できるということです。これらを引き受けるために多大なエネルギーを要しますが、それに耐えきれない学生が増えています。

厳しい受験競争を勝ち抜くために、多くの学生が小学校時代から学習塾や予備校に通っています。そこでは効率的な学習が推奨、ときに強要されます。試行錯誤しながら自分に合った学習スタイルを見出す余裕はなく、その経験も不十分です。いわば管理された学習に慣れきった状態で大学入学後にいきなり主体的な学習を求められても、すぐに転換できないのはある意味では当然です。

**正課外活動の機会を増やすために**

問題は、学びに必要なエネルギーを一人ひとりの学生にいかに獲得させるかです。方策の一つは多様な学習機会を増やし、学生が主体性を発揮できる状態を創り出し、実際にそれを経験させることです。正課外活動はその学習機会に富んでいます。ここには教員や職員の関与する余地は少なく、かれらが伸び伸びと活動できる可能性があります。

正課外活動の機会を大学としていかに保障するかは、授業への学生の主体性確立、学習の質、ひいては授業の質を大きく規定します。名古屋大学では、学生自身による多様な正課外活動が行われていますし、大学側もさまざまな便宜と機会を提供しています。

経済的事情や遠距離通学等で参加できない学生の実情をふまえつつ、それらの情報を学生が確実にキャッチし実際に参加できるようにすること、そのために学生を巻き込んで、いま一段の工夫と試行を行うことが必要ではないでしょうか。

（夏目達也）

## 『大学の教員免許業務 Q&A』を出版

教職課程が設置されている大学、短期大学、大学院の数は 1000 校を超えます。教員養成を主な目的とする教育学部以外の学生でも教員免許状が取得することができるからです。開放制の教員養成制度と呼ばれるこの制度では、多様な能力や経験をもった卒業生が学校の教員になることが期待されています。名古屋大学では８学部 12 研究科において教員免許状が取得できます。

多くの機関において教員という重要な専門職養成が行われているにも関わらず、教員免許業務に関わるミスやトラブルが多発しています。新聞記事になったり、大学が学生から訴えられたりする事例も毎年のように見られます。その理由は２つあります。ひとつは、教員免許業務に関わる法規が複雑で、さらに改正が繰り返されるため、法規の全体像を理解するのが容易でないからです。もうひとつは、このような複雑な業務にも関わらず、各機関において教員免許業務に必要な知識を整理し、担当者が交代しても必要な知識を引き継いでいく仕組みが十分にできていないからです。

そのような課題意識のもとで、FD・SD 教育改善支援拠点事業の研究会では、教員免許業務に関する実践的な知識を収集し整理することを試みてきました。その成果のひとつが、『大学の教員免許業務　Q＆A』（玉川大学出版部）です。教員免許業務に必要な知識を現場の視点からわかりやすくまとめた点に特徴があると言えます。

『大学の教員免許業務　Q＆A』は、教員免許業務に携わる教職員が日々の業務を進めていく上での指針となるでしょう。多くの関係者に読んでいただき、実際の教員免許業務に活用していただけることを期待しております。

（中井俊樹）

## 「大学教育改革フォーラム in東海2015」を開催

詳しくはウェブサイトにて！

URL（http://tokai-forum.jp/index.html）

ポスター発表募集中　1/14 締切

**かわらばん**への皆さまのご意見・ご感想をお寄せください
Ｅメールアドレス　info@cshe.nagoya-u.ac.jp

# 改革に直面する中国の高水準大学づくり事業

高　益民　客員准教授／北京師範大学

中南大学の張尭学学長の内部発言（2014年5月）を発端とした、高水準大学づくり事業が廃止される噂は中国で物議を醸している。北京第二外国語大学の周烈学長をはじめ一部の大学長は廃止への支持を公言しており、騒然たるマスコミも同調するものが多い。『新京報』の世論調査によれば、4割強の人は廃止賛成だという。

高水準大学づくり事業の最も重要なプロジェクトとして、「211プロジェクト」（現在112校）と、「985プロジェクト」（現在39校）があり、選定された大学には資金配分をはじめ様々な優遇策が講じられている。厳しい財政状況の中で、集中的投入によって少数ながらもワールドクラスの大学をいち早く産出するのがこの政策の狙いである。プロジェクトが実施されて以来、予想どおりに一部の大学はインフラが急速に改善され、一部の専門領域も世界ランキングでの順位が上昇し、『中長期教育改革発展規画綱要（2010－2020）』は事業の更なる推進を確認している。

一方、この事業は大学間の序列構造をつくり、公平な競争を損なっていることへの不満も募っている。全大学数のわずか6％にすぎない事業校が、政府の高等教育関係研究費の70％を占めている。それに、事業校と非事業校との障壁は厚く、評価を通じた両者の入替が見られないという固定化した構造をなしている。また、非事業校は選定指標に沿って規模拡大や機関合併等を追求し、独自の特色を喪失してしまう不利益を被っている。事業校も重複投資や無駄使いなどの非効率の問題を抱えている。さらに、選定や資金配分は教育部（日本の文部科学省に相当）に直接に把握され、そのプロセスに公開性や公平性に欠ける問題があり、政府による大学干渉を合理化し、大学の自主性を低下させることも指摘されている。

教育部は「廃止の状況は存在せず」（11月13日）と公式に噂を否定する一方で、事業改革の可能性を示唆している。政府主導の競争的資金の運用への見直し、独立した評価・資金配分機関の整備、中間大学や高等教育全体の質的向上を改革の視野に入れるべきではないかと思われる。

## Higher Education Glossary
### 高等教育にまつわる用語集

### アイスブレイク
### Icebreaker

アイスブレイクとは、受講者の緊張をほぐすことを目的とした活動です。参加者の不安や緊張を氷にたとえ、硬い氷をこわす／溶かすという意味を持っています。

授業の一回目に不安を感じているのは、教員だけではありません。学生もどのような教員が来るのか、他の受講生はどのような人なのかなど非常に不安を感じています。このような不安を和らげ、学生に参加しやすい雰囲気をつくるうえで、アイスブレイクは効果的な手法です。

アイスブレイクには、いろいろな種類があります。これまでのあなたの授業に対する学生の反応から、実施するアイスブレイクを決めましょう。もし学生が緊張して毎回授業に望んでいるようならば、楽しさを強調した活動を行うとよいです。反対に、学生が怠けているようなことが多ければ、授業内容と関連させたアイスブレイクをするとよいです。

アイスブレイクの手法は、さまざまな書籍やＷｅｂサイトで紹介されています。たとえば、京都産業大学は、大学の授業場面で使うことのできるアイスブレイクを集め、『キャンパスで使える！アイスブレイク集』を公開しています。

アイスブレイクには、ゲーム性の高いものがありますが、教室内でゲームをすることに抵抗を感じる学生も多くいます。もしゲーム性の高いアイスブレイクを実施するならば、短いものにするか、うまく機能していない場合に途中でやめることのできるものにしておきましょう。また、何のためにやったのか分からないということが起きないように、アイスブレイクをやる場合は、目的をきちんと学生に提示することが重要です。

個人的な質問というのは、初対面の人には答えにくいものです。その可能性がある質問や活動を避けることが賢明です。また、さまざまな理由でどうしても参加しづらい人がいる場合があります。参加しない権利を保障し、強制的な参加にならないようにしましょう。

（小林忠資）

## 読んでおきたいこの1冊
Great Books on University

### 『申し訳ない、御社をつぶしたのは私です。
### ―コンサルタントはこうして組織をぐちゃぐちゃにする―』

カレン・フェラン著　神崎朗子 翻訳
2014年3月　大和書房

今年も評価の季節となり、部局の年度計画の評価と次年度計画の策定に関わる方も多いかと思います。現在ではどの国立大学法人でも、全学統一の計画・評価様式を持っており、ワークシートに計画内容や進捗指標を記入するだけで提出できるよう工夫が図られています。

本書は、一見、コンサルタント無用論にも見えるタイトルですが、コンサルタントは正しく利用すれば有益であるという趣旨で書かれています。話題のビジネス書として手にされた方も多いでしょう。著者は、米国の著名大学でMBAを取得後、大手コンサルティング会社のコンサルタントとして様々な会社の経営支援を行ってきた経験から、文書上で作成する戦略計画や数値目標の弊害を指摘しています。本書の主張の１つに、「組織の運営で最も大切なことは構成員間の本音の議論である」という点があります。中期経営計画をまとめた文書やスライド資料自体にはほとんど意味はなく、それが作成される過程でどれだけ関係者が本気で考え、意見を交わしたかが重要であるという指摘です。至極、当然のことですが、私たち自身もワークシート数行の内容が何時間も議論を重ねた結果であるかと問われると、心許ないでしょう。

本書では、そうした議論を行うためにコンサルタントを活用しろと指摘します。つまり、部外者による素朴な質問に答える中で組織内の議論が活性化される、そうした議論の促進剤としてのコンサルタントであれば、組織に有益な示唆をもたらすとのことです。

（中島英博）

**高等教育研究センタースタッフ**（2014年10月現在）

| | | |
|---|---|---|
| センター長 | 水谷 法美 | 専門領域：海岸・海洋工学 |
| 教授 | 夏目 達也 | 専門領域：高等教育学、技術・職業教育論 |
| 准教授 | 中井 俊樹 | 専門領域：大学教育論、高等教育マネジメント |
| 准教授 | 中島 英博 | 専門領域：高等教育マネジメント |
| 助教 | 齋藤 芳子 | 専門領域：科学技術社会論 |
| 研究員 | 小林 忠資 | 専門領域：比較教育学・教育人類学・高等教育論 |
| 客員 | マリア・テレシア・ネラッド | （米国・ワシントン大学） |
| | 高 益民 | （中国・北京師範大学） |
| | 野末 俊比古 | （青山学院大学教育人間科学部） |
| | 中原 淳 | （東京大学大学総合教育研究センター） |
| | 青野 透 | （金沢大学大学教育開発・支援センター） |

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail　info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/